

徳川三代

覇者の決断編

# 家光の野望

霧島那智



PLAYBOOKS

歴史連続シミュレーションの堂々完結!

幕府軍、ついに江戸から進撃開始。

将軍・家光を待ち受ける恐るべき「刺客集団」

読者のみなさんへ

この本をお読みになって、特に感銘をもたれたところや、ご不満のあるところなど、忌憚のないご意見を当編集部あてにお送りください。

また、わたくしどもでは、みなさんの斬新なアイデアをお聞きしたいと思っています。

「私のアイデア」を生かしたいとお思いの方は、どしどしお寄せください。これからの企画にできるだけ反映させていきたいと考えています。

なお、採用の分には、記念品を贈呈させていただきます。

青春出版社 編集部

はしや けつだん へん  
覇者の決断 編  
とくがわさんだい いえみつ やぼう  
徳川三代 家光の野望

プレイブックス  
**PLAYBOOKS**

2000年11月25日 第1刷

著者 きりしま なち  
霧島那智

発行者 小澤源太郎

発行所 東京都新宿区 株式会社 青春出版社  
若松町12番1号  
〒162-0056

電話 編集部 03(3203)5123 振替番号 00190-7-98602  
営業部 03(3207)1916

印刷・錦明印刷 製本・誠幸堂

ISBN 4-413-01817-6

©Nachi Kirishima 2000 Printed in Japan

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複製(コピー)することは著作権法上認められている場合を除き、禁じられています。

覇者の決断編

徳川三代

家光の野望

プレイブックス  
*PLAYBOOKS*



徳川三代 家光の野望 ● 目次

第一章 「第六次」川中島の合戦、

ついに東西両軍が激突！

13

第二章 将軍・家光は、

ようやく「事の真相」を察知する

39

第三章 柳生十兵衛、服部半蔵を従え、

家光は急ぎ雁坂峠へ

61

第四章 宇喜多秀家、

「刺客・宮本武蔵」を放つ

85

第五章 徳川「親族評定」の場に、

いよいよ武蔵が斬り込む

107

第六章 絶体絶命の危機！

將軍は、間一髪で……

129

第七章 いざ、徳川一門の大將、

信濃の地に大移動す

151

第八章 独眼竜・伊達政宗は、

つぎつぎに越後路を制圧！

175

第九章 起死回生へ、病身を押し、

上田城に向かう家光

195

第十章 征夷大將軍・家光、

堂々その權威を示す

217

カバーイラスト 若菜等＋Ki

本文図版作成 フジマックオフィス

## 「徳川三代 家光の野望」これまでの流れ

元和九年（一六二三年）の秋―。

徳川の御三家である尾張の徳川義直と紀伊の徳川頼宣よりのぶが謀議し、飛騨高山に幽閉中の兄・松平忠輝ただてるを味方にして政權を奪取すべく、第二代將軍・徳川秀忠ひでただから家光への將軍位繼承を機に、謀反むほんの旗揚げをした。

秀忠が家康の死を契機に忠輝や松平忠直ただなおを取り潰す挙に出たことで、義直も頼宣も、次は自分たちが取り潰されるのではないかと恐れたのである。

尾張・紀伊連合軍は大御所となった秀忠を京からの帰途に襲い、桑名と宮を結ぶ、七里の渡しわたで討ち果たすと、ただちに東海道を、江戸方面に急ぎ東進を開始した。

この時、忠輝も飛騨を脱出して越前に潜入し、根回しを充分に行なっており、呼応こおうして北ノ庄で旗揚げした。

忠輝軍は旧臣たちを糾合きゆうごうし、尾張軍の支援別働隊や近隣の諸大名軍も麾下きかに加え、五万二千の大軍となって中山道なかせんを東進した。

七万五千の尾紀両軍は箱根の関所を落として芦ノ湖の東岸に布陣、そのまま尾張軍は箱根を固めた。

また、紀伊軍は籠坂峠かこさかを越えて甲斐かいに転進し、甲州街道の要衝・賑岡にぎおか（現在の犬伏市）を押さえた。

東海道、甲州街道、中山道の三主要街道をすべて封鎖し、徳川幕府を経済的に孤立させるのが忠輝・義直・頼宣の三兄弟の基本作戦であった。

さて、関ヶ原の合戦をはるかに上回る徳川家の危機の勃発ぼつぱつに、新將軍・家光と忠長の兄弟は焦燥を深め、急ぎ軍備を整えると同時に、さまざまな政略も打ち出した。

まず、六十一万五千石の伊達政宗だてまさむねへの対策として、仙台藩における切支丹信仰キリシタンの承認、伊達家が独自にヨーロッパの列強国と外交同盟を結ぶ権利の承認と、伊達家および仙台藩を、国内独立国どこくどくりつこくとして承認する苦肉の策を打ち出した。

次いで、最大の外様大名、加賀の前田家を味方に引き入れるために、当主・前田利常ととしつねの姉婿である宇喜多秀家うきたひでえを配流地の八丈島から迎えた。

秀家は関ヶ原の合戦で敗れ、二人の息子と共に八丈島に流されていたのである。

しかし、伊達政宗も宇喜多秀家も到着しないうちに合戦が始まり、忠長が幕府軍別働隊

を率<sup>ひき</sup>いて中山道方面に向かった。

ところが、未熟な忠長の作戦は完全に忠輝軍に見抜かれており、忠長軍は榛名山<sup>はるな</sup>の麓<sup>ふもと</sup>で奇襲攻撃を受け、捕虜になってしまった。

その後になって、ようやく八丈島から秀家も江戸に到着、伊達政宗も仙台で腰を上げて進発した。

この政宗の動きであるが、徳川家が真つ二つに分裂したも同然の状況では、根っからの野心家の、独眼竜<sup>どがんりゆう</sup>が、素直に家光の希望に従うわけがなかった。

かつて政宗は、東北全土を掌<sup>しやうちゆう</sup>中におさめようと南進して次々に各地を切り従え、会津をも領するに到ったが、あまりにも伊達家が膨張する状況を嫌った豊臣秀吉によって取り上げられ、仙台に押し戻された経緯<sup>けいゐ</sup>がある。

秀吉も家康も秀忠もいなくなった現在、政宗にとっては再び天下掌握の野心に点火する絶好機であり、自分の行動に文句をつけれられない幕府の足元を見て、事のついでに会津<sup>へいどん</sup>を併吞<sup>へいどん</sup>してやろうと企<sup>たくら</sup>んだ。

政宗は、会津藩の蒲生<sup>がもう</sup>家が謀反軍に内通しているという口実をデッチ上げ、会津に侵攻して瞬<sup>またた</sup>く間に鶴ヶ城を攻め落とし、蒲生忠郷<sup>たんだと</sup>の首級<sup>しゆきゆう</sup>を挙げたのである。

伊達軍は、会津藩兵も丸呑みに麾下きかに加えて、三万の陣容に膨張した。

謀反軍鎮圧のためには何としても伊達軍の力が必要な幕府は、文句をつけれない。

蒲生忠郷あんぐが暗愚で人望もなかったことから、政宗の口実を容認し、水戸の徳川頼房よりふさ率いる一万六千の水戸軍も加わって四万六千の大軍となり、越後に向かって進撃した。

その頃、出羽米沢の上杉家も、かつての領地・越後を奪還しようと伊達軍と呼応、当主・上杉定勝さだかつが一万の軍勢を率いて別経路で越後を目指していた。

また、宇喜多秀家は、幕府から一万五千の将兵を預けられ、前田家の江戸留守部隊の一千も加えて、まず越後に出ようと三国街道みくにを北上していった。

伊達軍も宇喜多軍も「まず越後を」と考えた理由は、この当時から越後が一大穀倉地帯だったからで、越後を押さえるか否かで以降の合戦の動向が根底から変わってしまうことによる。

しかし、謀反軍の一翼を担になう松平忠輝もまた、そんなことは十二分に承知しており、甥おいの松平忠昌ただまさを旗揚げと同時に動かして早々に越後を確保しようと考えていた。

越後高田藩二十五万石の藩主・忠昌は三万の軍勢を電光石火に動かし、一夜にして長岡藩を制圧した。

越後にはほかに村上藩と新発田藩があつたが、この両藩は北方から進撃してくる上杉家に対しては古くからの確執があり、忠昌の麾下に加わる道を選んだ。

そうになると、越後の謀反軍だけでも最大七万の軍勢を動員できるから、秀家の一万六千の兵力では大幅に不足である。

ひと足違いで越後制圧の見通しがなくなり、越後攻めを断念した秀家は、とにかく前田家と合流しようと、方向転換して信濃に向かった。

これは、碓氷峠に布陣した忠輝軍の背後を衝くことにもなる。

宇喜多軍は信濃川、千曲川沿いに西進して飯山を抜け、善光寺平に本陣を置いて前田軍の合流を待った。

ここで秀家は豊臣恩顧の老将・福島正則を味方に引き入れ、かつての古戦場・川中島で忠輝軍と合戦しようと戦略を巡らせた。

関ヶ原の合戦では東西に分かれて戦った正則であるが、その時の手柄も無視されて改易の憂き目に遭い、幕府に対して深い怨嗟の念を抱いていた。

幕府の味方をして謀反軍を討つかのように偽装しながら、実際には幕府を倒して天下を取ろうという秀家の呼びかけに、正則は二つ返事で参戦を快諾し、忠輝軍との決戦態勢に

入った。

忠輝軍は五万、宇喜多軍は二万五千だが、前田軍が来着すれば八万の陣容にふくれ上がる。

前田軍が未着の状態で川中島の合戦の火蓋は切られたが、この報は江戸城の家光の許にも届いた。

家光が幕府直属軍を率いて駆けつければ、まず間違いなく碓氷峠は攻め落とせ、謀反軍は東西からの挟撃で必ず瓦解する。

こうした見通しの下に、家光は三万の幕府直属軍を率いて急ぎ江戸城を進発、中山道を碓氷峠に向かったのであった……。

# 第一章

## 「第六次」川中島の合戦、

ついに東西両軍が激突！

## 「第六次」川中島の合戦

元和九年（一六二三年）九月十五日――。

信濃の川中島平で、宇喜多秀家の率いる軍勢に松平忠輝の率いる軍勢が突入し、川中島の合戦が始まった。

かつて、この地では武田信玄と上杉謙信の間で、実に前後五回にもわたって川中島の合戦が行なわれた。

したがって、今回の合戦は、第六次川中島の合戦となるのだが、日本戦史に名をとどめる五度の川中島の合戦とは根本的に異なっている点がある。

それは、信玄と謙信の合戦は、この北信濃の地の覇権を争う局地戦であったが、今回は同時並行に東海道でも甲州街道でも越後方面でも東西両軍が激突して、ほぼ日本の半分が戦地となる全国戦だという点である。

忠輝は、敵側に前田軍が参戦する前に何とか宇喜多軍を叩いてしまおうと躍起（やつき）になっていた。

前田軍の動向を探ろうと、忠輝は斥候兵せつこうを何人も北陸方面に送り出していたが、誰一人として報告に帰投していなかった。

実は、この時代の屈指の劍豪として知られた宮本武蔵は宇喜多秀家の子飼いの忍びで、十六人もの同姓同名の大勢がいた。

その武蔵が、忠輝の放った斥候たちを片っ端から斬り捨て、いっさい前田軍に関する情報情報が忠輝軍に伝わらないよう、情報封鎖情報封鎖を行なっていたのである。

いつ前田軍が出現するのかわからない一抔いちまっの不安を覚えつつも、忠輝軍は宇喜多軍に突入し、兵力の優位に任せて相手方を押しまくった。

開戦して最初のうちは、東西いずれの軍勢が優勢かは判然としなかったが、ほどなくして二倍の戦力を有する忠輝軍が優勢となった。

大人数が激突する合戦は、何万もが激突するといっても、最初は最前線の数百だけである。

それが、合戦が入り乱れるにつれて数千に、一万にと、ぶつかり合う人数が増えていく。そして、ようやく全軍が入り乱れる状況になるが、そこで初めて、兵力の差異が戦況に影響を及ぼすのだ。